地域調査報告　19　1-10　1997

明治初期福島盆地の地域性
――明治８年の『信達二郡村誌』の分析――

斎藤　功

キーワード：福島盆地，農閑余業，紙漉，蚕種・製糸業，地域区分

Ⅰ　はじめに

福島盆地の地域研究を実施するに際し，筆者は当初田中啓爾が提起し，川崎市の研究で実証した初象・顕象・残象といった概念（田中，1949；1958）を援用し，人文現象の層序学的研究を志した。そこで，江戸時代の残象としての水車を指標として使うため明治初期の資料である『共武政表』(明治８年版，明治12年版)[1]と『徴発物件一覧』(明治16年版，明治20年版)[2]をみたところ，掲載されている町村数が少ないことが気になった。さらに資料を探したところ，1980年に復刻された中川英右編(1869)：『信夫郡村誌』と『伊達郡村誌』が存在することがわかった。その郡村誌はほぼ明治８年の調査に基づき明治12年に編纂されたもので，『共武政表』と同じ年の資料でり，地域的には福島盆地をカバーするものであった。両者を比較したところ，水車数に若干の差異があることが判明した[3]。そこで研究の方向を転換し，この資料を使って明治初期の福島盆地の地域性を解明することを本稿の目的とした。

『信夫郡村誌・伊達郡村誌』(以下信達二郡村誌)には町村の由来，区域，幅員，管轄沿革，里程，地勢，地味，税地，字地，貢租，戸数，人数，舟車，山，森林，道路，公園，寺社，学校，電線，古跡，物産，民業等が記載されている。もちろん，当時の事情を反映して記載内容は町村によってまちまちである。例えば物産の項で楮の生産量をみると，計量単位が貫，斤，駄，荷，束などと不統一なことである。また，民業の項で，大工は木匠とも書かれ，木挽・樵などと字が異なる場合，それは本当に同一の職業を意味するものであるのか若干の疑問が残る。さらに，もっと大きな問題は記載もれである。というのは，貢租と産物・民業を比較すると当然書いてければならない旅籠，鑑札を必要とする狩猟（銃猟）等が漏れていることもあるからである。しかし，それらの精粗を考えても本書の資料価値は極めて高いといえよう。

この『信達二郡村誌』を使っての福島盆地における地域性を論じたものに庄司（1954）と大石（1958）の研究がある。庄司は福島盆地を①水田地帯，②畑作兼水田地帯，③水田兼畑作地帯に区分した。①は福島，瀬上などの諸村で生糸の生産地帯でもあり，②は伏黒，桑折，保原，掛田村などの蚕種・生糸の生産地帯であり，③は川俣，大久保，飯野，立子山村等の平絹生産地であったという。また，大石は伊達郡北部，南部，信夫郡北部，南部の４地域に区分した。さらに，町村史等においても「府県税の新設と村税」として旧藩時代に小物成，運上金，冥加金を徴収されなかった業種にまで府県税が課されたことを明らかにしている（国見町，1967）。

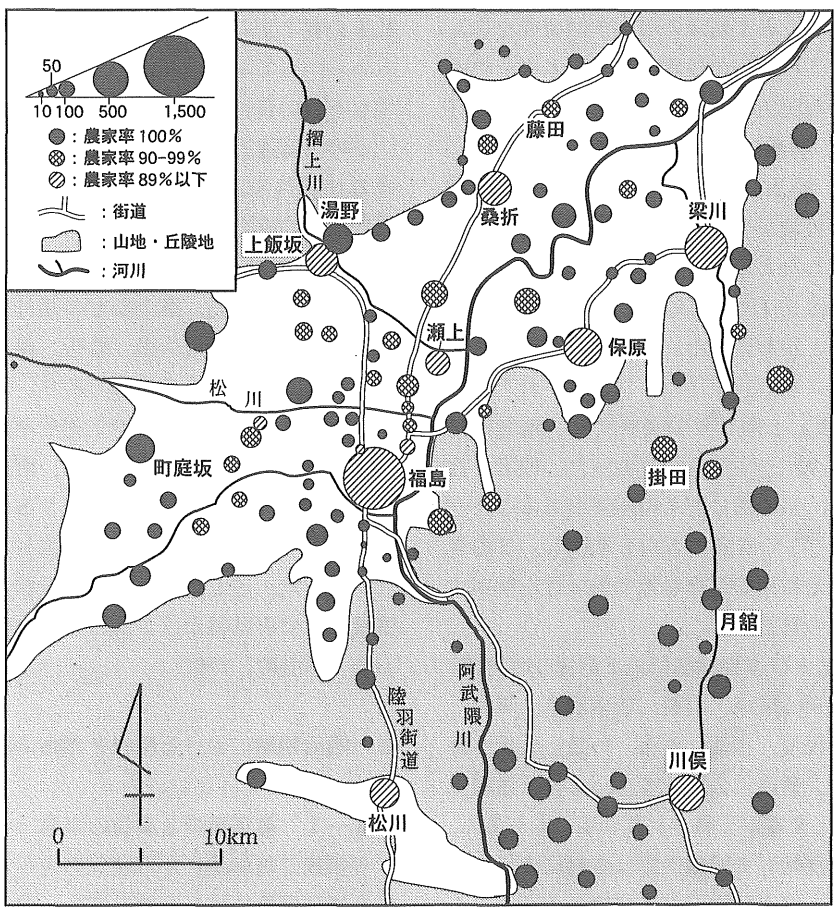
Ⅱ　明治初期における農村と都市の諸相

Ⅱ－１　集落規模と農村の卓越

『信達二郡村誌』から統計の得られる両郡の全域を研究対象地域とした。信夫・伊達郡の中心は福島盆地である。福島盆地の盆地床は，地元では信達平野とも呼ばれる。周知のように福島盆地は

西の奥羽山系に属する吾妻連峰と東の阿武隈山地に挟まれた地域であり，阿武隈川は東の阿武隈山地に沿って北流し，伊達郡の平野部の中央を北東に流れる。福島盆地の西縁には南から荒川，松川，摺上川の扇状地が発達する。これらの扇状地では現在果樹園が支配的であるが，明治末の地形図によれば水田と桑園および採草地が卓越していた。松川扇状地の洪水防止林や防砂林の存在は，これら扇状地河川が荒れ川であったことの名残を示している。

第１図は明治初期の両郡の町村における戸数の分布と農家率を示したものである。行政的には町は1,577戸を擁する福島町だけで，他は全て村であった。村の戸数規模は信夫郡太平寺村の14戸，李平村の17戸を最低に49戸以下16村，50－99戸54村，100－149戸40村，150－199戸22村，200－299戸19村，300－499戸５村，500戸以上は福島，梁川，保原，川俣，桑折の５町村であった。一般に福島盆地の盆地床では集落規模が100戸前後で小さく，周辺では大きかった。つまり，盆地の北西縁では茂庭（247戸），大笹生（337），庭坂（333），水原（152），松川（352戸）の村々で大きかった。これは阿武隈山地の山間集落にも妥当し，富沢（224），立子山（215），青木（203）村をはじめ，東端の山舟生（240），白根（222），大石（277），石田（300），小島（214），飯坂（193）小綱木（122）の村々がその例である。これら周辺部の村々は明治22年の町村制施行に際し，そのまま町村になっ



第１図　明治初期信夫・安達郡の町村規模と農家率

資料：中川英右編（1869）による.

たが，盆地部の農村では２－８の村々が合併して町村になったので，当時の村の多くは大字になった。しかし，当時の村には桑折，瀬上，松川のように奥州街道に沿った宿場町や梁川，保原，川俣などの主要街道に沿った宿場町や地方都市も含まれていた。また，上飯坂村や土湯村のような温泉町や大石村のような門前町も存在した。

『信達二郡村誌』の記載の特徴は，第１に福島盆地における農村の卓越ということができよう。それを明確にするために町村別農家率を作成した。農家率農家数を総戸数で割ったものであるから，先ず総戸数は本籍戸数（士族と平民）とした。農家数は「男農桑ヲ業トスル者五十六戸，農ヲ業トスル者五戸」（岡島村）という場合は，その合計数を農家数とした。また，一般に「男ハ皆農桑ニ服事ス」（泉村）という表現が多いが，その場合は本籍戸数と農家数が同じ，つまり農家率100％とした（農家率が算出できない場合は，前後関係から類推して出来る限り農家率を算出した）。第１図よると福島町の近郊，陸羽街道沿いの宿場町や村々，阿武隈川の河岸集落を除いて農家率100％の農村が支配的であった。しかし，農家率100％といっても必ずしも純農村を意味するものではなく，後述するように農村には多様な農間余業が存在していたのである。

一方，農家率は福島町の19.0％を最低に，藤田（62％），桑折（80），瀬上（87），松川（46）といった奥州街道に沿う旧宿場町で低かったことがわかる（第１図参照）。この農家率の低さは保原（58），梁川（59）へと続く角田街道，掛田（68），月舘（76），川俣（49）へ続く現国道349号線についても妥当する。一般に，軽井沢や箱根など宿場町は参勤交代の廃止で明治初期には衰退あるいは農業へ復帰するものが増えたといわれている（斎藤，1994）。

第１表　福島盆地における町村の人口と都市機能の構成（明治８年）

単位：戸

	町　村	人口	戸数	旅籠	質屋	理髪	食堂	菓子	鼈甲	呉服	糸綿	荒物	履物	穀商魚商	醸造	人力車
1	福島町	8,237	1,577	80	30	12	34	18	38	96	56	421	11	51 22	14	23
2	梁川村	4,120	756	25	12	8	22	15		3		2		1	6	32
2	保原村	3,603	599	24	6	5	15	12	3	3	1	6		3	8	9	13
2	桑折村	2,607	512	37	5	4	19		1	9	1	22	2	13	12	13	49
2	川俣村	2,650	523			9		5	11	34		45		34	16	18	9
2	上飯坂	2,212	408	29	8	4	22	8	4	10	90	8		14	3	18	14
3	藤田村	1,221	138	16	11	5	11	5	18	18	14	56	3	22	6	23	25
3	松川村	1,906	352	47	5			11	1	6	15	21	16	9	8	17	28
3	掛田村	1,492	263	22	6	3		5	1	4	1	18	2	19	6	24	6
3	飯野村	1,198	212		2	1		5		10		7		8	2	7	
(3)	長岡村	1,656	287		3											2	6
(3)	大森村	1,128	186	2	3	1		1		1	1		1			2	
(3)	月舘村	837	171	3	4	1		4	1	6		12	1	7	5	14	
(3)	坂庭村	2,008	333	8	5							4					2
4	土湯村	448	76	15			2					5	10	4			

ブランクは記載漏れ，あるいは無し．戸数は平民本籍と士族本籍戸数の合計．旅籠は旅籠・貸座敷の合計．質屋（当商），理髪は髪結・剃髢，食堂は料理屋・蕎麦屋・貸食など，鼈甲には骨董・塗物を含めた．呉服には洋服・古手商・裁縫（仕立屋）を含め，糸綿は糸商・綿商・生糸商を含めた．荒物は荒物・小間物の合計．醸造には酒醸造ばかりでなく醤油・味噌・麹・酢も含めた．

資料：中川英右編（1869）『信夫郡村誌』および『伊達郡村誌』による．

Ⅱ－2　明治初期の都市階層

農家率が低いことは，逆に非農家率が高いこと，つまり都市化の進展を示すものであろう。そこで，『信達二郡村誌』記載の都市的要素と思われる職業を抜き出してみたのが，第1表である。そこには，普遍的に存在した学校・郵便局・役所などの機能が含まれていないので，商業機能で代替させた。第1表によると，戸数，人口とも福島町がぬきんでている。それは旅籠，質屋などの宿泊・金融機能，鼈甲・呉服などの高級品，および理髪（髪結・剃髢），食堂などのサービス業についてもいえる。かつて柳田国男が，都市には「田舎にない風」[4]があると述べたが，明治初年の都市的要素は客商売，つまり，逆旅という言葉があるように旅人が宿泊する旅館（旅籠屋・旅宿・逆旅・客舎，貸座敷を含めた），質屋（当商，質貸），周旋屋（雇人口入・雇周旅人・雇人媒），飲食店（料理酒葷・蕎麦・餅・鮓・貸食），人力車数などに表れている。

福島についで戸数，人口が多いのは，梁川村で，保原，桑折，上飯坂村が続いた。旅籠数では宿場町であった桑折が梁川や保原を越え，人力車数も多かったことから交通要衝の町であったことがわかる。また，阿武隈山地の中の川俣村は街道集落に加え，広い後背地をもった地方中心都市ということができよう。それは，鼈甲・呉服，荒物，穀商・魚商などの商業機能が高いからである。さらに，上飯坂村は温泉町であったので，旅籠や食堂数（飲食関係は貸食18戸，菓匠8戸，切芬11戸，餅師7戸，灸鰻2戸，鮓匠3戸など）が多いのは当然としても，鼈甲・呉服，糸商も多いことから地方中心都市的性格も兼ねていたと思われる。これらより一段，都市機能が劣る町として松川，藤田，瀬上，掛田，飯野村があった。これらに準ずる都市的機能を揃えた村に長岡，大森，月舘，坂庭村が存在した。

ここで，明治41年測図，大正14年鉄道挿入の地形図によると都市域（Built-up area）の面積は福島市を筆頭に，第2位に伊達郡役所所在地である保原，陸羽街道宿場町桑折，温泉町の上飯坂および梁川，川俣がくる。しかし，同じ陸羽街道宿場町であっても藤田，瀬上，松川は，地方都市の掛田や飯野とともに第3位の都市に属する。また長岡，大森，町坂庭は，それに準ずる町であったといえる（第1図参照）。

Ⅱ－3　農間余業の多様性

『信達二郡村誌』記載の村は，戸数は50－300戸前後が一般的で，民業の欄に職業の記載があり，専門の商店がない場合は，余業として職業分類が記載されている。農村にも穀物商や質屋等の商業も存在していたが，女性が携わった蚕種製造，真

第2表　福島盆地東西線に沿う農村の農間余業者数（明治8年）

地区	村名	戸数	農桑	商業	大工	木挽	石工	左官	畳	葺匠	桶工	鍛冶	紙漉	薪炭	博労	漁労	狩猟	綿打
山地	大笹生	337	337			5								12	1		5	
山麓	南澤又	96	96	1	3		1	1	1	1				4				
扇状地	下飯坂	65	65							1			6		1	2	2	
平地	宮代	129	124		1		1	2								1		
平地	長岡	287		5	5		2			6	1	2						
平地	伏黒	269		7	2	1		1										
山麓	上保原	163	163	33	8	3				5	1			2				1
山麓	柱田	151	151	1	2	1		1	2	2	1		6		1		4	
丘陵	山野川	71	71	3	1	2					1		1					
丘陵	石田	300	300	16	6	10	1	1		4	3	2			7			1

資料：中川英右編（1869）『信夫郡村誌』および『伊達郡村誌』による．

綿，製糸などは農間余業として記載されていない。つまり，「女養蚕製糸ヲ業トシ且耕嫁ヲ助ル者百十二人兼ルニ莚織ヲ以テスル者二十人」（沖高村）とあるように，女性の副業は農業に関連する当然の仕事と見られていたからである。しかし，『信達二郡村誌』は農業と商工業の混在（未分化），インドの村落のように豊かな包容力を有する，多様性に富んだ混沌たる農村の姿が浮き彫りにしているように思われる。

第2表は福島盆地を西から東に横断する形で農村を取り上げその様相を示したものである。それによると農間余業の普遍的な職業として大工・屋根葺・左官が存在していた。これは家の建築等が地域ぐるみで行われていた，共同体的色彩の強かった当時の農村を考えると当然のことといえよう。つまり，一人の農民が多様な仕事をこなしていたのだから，農村には大工・左官・屋根葺などの広範な予備軍を抱えていたと考えられる。一方，農具を製造していた鍛冶は長岡村と石田村にみられるように一つの村より広い範囲を顧客にしていたと考えられ，どの村にも存在しなかった。例えば，鍛冶屋を兼ねていた1軒は「鎌千梃，包丁百梃，以上近村及ヒ福島ニ鬻ク」（下野寺村）と書かれている。また，福島町では22軒の鍛冶屋で鍬，三本鍬，唐鍬，山刀，鎌，包丁，押切，斧，手斧等が製造されており，信夫山の羽黒神社の祭礼の際に販売されていたと思われる。数村に1軒というような農間余業としては畳職，桶工，染工（匠），水車稼ぎなども妥当しよう。

一方，木挽，薪炭，狩猟（大笹尾では銃猟ではなく，鳥猟が存在した），紙漉等は丘陵地や山間地という盆地の地域性を反映したものとして了解できる。さらに，南又沢村や石田村の綿打のように渡職人も存在した。周知のように綿打職人（綿匠・弾綿）は綿打弓を用いて綿をつむぎやすいように梳く職人のことである。このほか渡り職人には鋳掛屋（補鍋匠）やラオ屋（煙管掃除）も存在した。移動する職業に行商もあり，農間余業として販食（担い売り）・貸郎（小間物売り）・魚行商等も存在した。クロートもフランスにおいて鋳掛屋，煙突掃除，屋根葺等の渡り職人や行商が存在していたことを明らかにしている（Clout, 1972）。

なお，明治初期には養蚕業の発展に伴い富農経営の出現で村内でも雇用機会が増大していたのである。富農経営では年雇，季節雇，月雇に加え，日雇は「桑つみをはじめ，繭掻き，蛾取り等の労働に際し，村内ないし周辺農村から雇われていた」（江波戸，1969）と述べている。つまり，商品経済の発展は農村に農閑余業に加え，季節的な農村労働者を雇用する機会を創出したといえよう。しかし，近代化に伴いそれらが農村から流出し，いなくなった[5]。

Ⅲ　物産による福島盆地の地域区分

Ⅲ－1　特産物の生産地域

1）鮭のとれた川

阿武隈川（郡村誌では逢隈川と記載）沿岸の集落では鮭漁が行われていた。現在の福島市の市街地に相当する旧福島町の対岸の渡利村（300匹）を中心に腰浜村（150），曽根田（100）で行われいたことは興味深い。また，記録では阿武隈川の上流部では田沢村までで，下流部では徳江，長岡，瀬上村で鮭漁が行われていた。特に長岡村の摺上川は「積雪融解シ出水殊ニ甚シ鮭魚鱒鮎等此ノ川ノ名産タリ」（中川英右，1869 b, I, 19）と記されている。『明治二十六年福島県伊達郡統計書』によると阿武隈川流域の盆地の村には曳網の，立子山村，飯野村でも梁の区画漁場が設定され，鮭，鮎が捕獲されていた。

鮭漁は「毎年，十月中旬から晩秋まで，産卵のため阿武隈川を上った鮭を捕るために，河原に小屋を設けて行った漁で，・・・川岸の瀬の深さ四，五〇センチ位の所に産卵し易い場所を作り，そこに囮の鮭をつないでおく。その周辺に紐を張り巡らし，少し離れた小屋の中に糸の端を引き込み鈴をつけておく。囮に近づく鮭が紐に触れると鈴が鳴る仕掛けで，素早く投網を持って，鮭に気づかれないように忍び足で川に入り，網を打って捕ま

る」（梁川町史編纂委員会，1991，258－259）というものであった。このような漁の他に「滝」と呼ばれた梁漁や鈎漁（ひっかけ漁）が存在した。なお，白石市斎川の特産とされている「孫太郎虫」も安達郡万正寺村で捕獲されていた。すなわち，同村の産ヶ澤川は「幅広キ処八間深サ壱尺許水中孫太郎虫ヲ生ス小児疳病ヲ治スルニ効アリト云」（中川英右，1869 b, I，211）と記載されている。

ところで，田中（1939）は，明治25年調査の『水産事項特別調査』を用いて阿武隈川，利根川阿賀野川，信濃川の鮭，鱒，鮎の遡河限界の図を作成している。その限界線によると阿武隈川は鮭，鱒，鮎の順に上流に達しているという棲み分論にも言及している。

また，阿武隈川の舟運は「舟筏上下往来シ漕運ノ便有リ」（瀬上村）とあるように福島町と五十澤村，須賀川と二本松の間にあった。これは，阿武隈山地を横断する猿跳峡およひ立子山の蓬莱峡を避けたためであろう。というのは，小野寺（1991）が指摘しているように江戸時代に猿跳峡の開削によって福島から荒浜までの舟運が行われていたのであるから，明治期になって舟運が後退したものであろう。

2）紙漉と楮の供給圏

和紙の製造，つまり紙漉は3つの地域に区分される。最大の産地は梁川町の旧白根（58,000枚）・山舟生（42,000），舟生（32,000），五十澤村（780帖，3,800帖）からなる舟生地区で，中折紙・杉原紙を漉いていた。桑折町の旧谷地村も杉原紙（3,200帖）を漉いていたので，この類型に入ろう。『明治二十六年福島県伊達郡統計書』によると和紙製造戸数は富野村（明治22年舟生，八幡村合併）39戸2,059貫で，白根村82戸1,750貫，山舟生村122戸625貫，五十澤村8戸480貫であった。

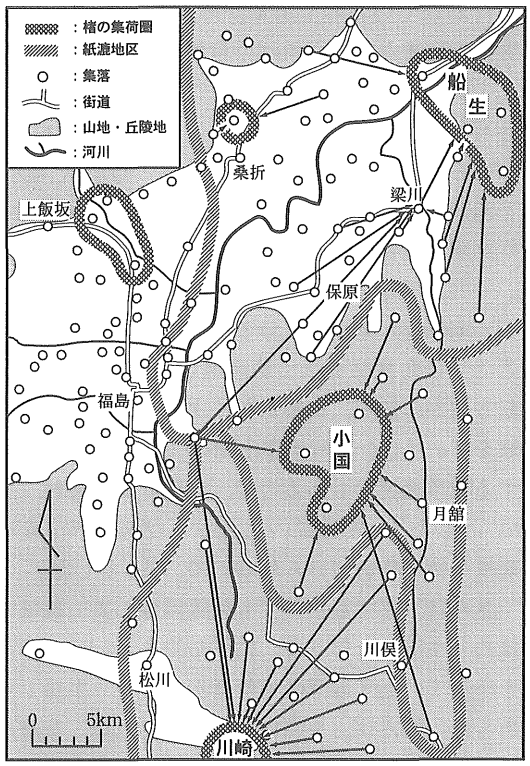
もう一つの地区は，大波，下小国，上小国村からなる小国地区で，蚕種原紙を中心に糸包紙，小料紙を漉いていた。この3村は明治22年に合併し，小国村となったが，前掲統計書によると和紙製造戸数65戸であった。また隣接の富成村は9戸488貫であった。その後紙漉戸数は明治31年の40戸から明治41年の26戸に減少している（霊山町史編纂委員会，1983，748）。製紙品目は蚕卵原紙で春蚕用が秋蚕用の4倍の割合であった。販路は福島県ばかりでなく，山形，宮城，新潟県にも及んだが，生産量の減少と伴に東北3県に限定されるようになった。第3の地域は，上飯坂・湯野・下飯坂村なる飯坂地区で，小津軽紙を漉いていた。前掲の安達郡統計書によると湯野村17戸469貫であった。

一方，楮の流通からみると小津軽紙を漉いていた飯坂地区は原料の楮を自給自足していたので，楮の供給地域も3つに区分される。これは伊達郡に隣接する安達郡川崎村に楮を供給していた地区が加わるからである。舟生地区は石母田村，梁川，泉原，八幡，大石村から供給されていた。さらに，梁川は平地村の二井田，大柳，粟野に加え，阿武隈山麓の大関，新田，中川村から楮を供給されていた。しかも，舟生村への供給量が9,000貫を越えていた事実を考え合わせると，楮を扱う梁川の商人が楮を集荷し（一次的集荷圏），舟生地区へ楮を二次的に供給していたことになろう。

また，小国地区は北部の富沢，所沢，山野川村から，南東部の秋山，糠田，御代田，下手渡，飯坂，小綱木，大綱木村から楮を供給されていた。一方，伊達郡南部の大綱木，西福沢，鶴澤，羽田，飯野，立子山，西飯野村および信夫郡の田所村は楮を安達郡川崎村（信夫郡伊達郡に接する下川崎村，上川崎村）に販売していた。したがって，糠田村や渡利村が小国地区と川崎地区との境界にあたっていた（第2図）。

3）養蚕・製糸・機業の地域分化

『信達二郡村誌』の民業の記載は，前述のように「男農桑を営ミ」という表現が一般的であり，「女養蚕ヲ営ミ，製糸ニ従事シテ家計ヲ助ク」というように，明治初期福島盆地では養蚕・製糸（座繰）が普遍的に普及していた。この様相を庄司は「平坦部では水田農業と養蚕経営が行われないものはないほど普及していることと，製糸は女の手



第２図　紙漉地域と楮の供給圏
資料：中川英右編（1869）.

で，これも各村に百人以上六百人近くまで専業に行われていた」（庄司，1954，152）と要約している。しかも，内部的には地域分化が進んでいたのである。

「蚕種千枚，以上・・・横濱ニ輸ス」（岡島村）というのが，一般的な表現であるが，白蚕種と青蚕種に区分されて記載されている場合もある。「白蚕種一萬五千二百枚，青蚕種四千七十枚，白種ハ国内エ賣ル青種ハ横濱エ賣ル」（二之袋村）というように蚕種輸出の好況を反映し，福島盆地のなかでも阿武隈川の自然堤防地域を中心に蚕種生産が盛んに行われていた。このことは信達平野の農村が深く，外国貿易を通じ商品経済に巻き込まれていたことを示すものであろう。周知のように幕末の開港とともに生糸は主力輸出品であったが，フランス，イタリアでの微粒子病の流行で蚕種輸出も脚光を浴びたのである。蚕種生産の核心地域伏黒村では農業所得は「明治７年に72.5％が蚕種代」（江波戸，1969）であったが，明治８年の輸出蚕種の大暴落を経て蚕種生産は減少したという。蚕種生産が復活したのは全国的に養蚕が普及してからである。また，「蚕種四百枚以上上等品上州大間々在並沼田在エ賣ル」（清水町村）と上州[6]や岩手や山形県にも移出されたのは，輸出から国内向けへの過渡的状況の一端を示すものといえよう。

製糸は蚕種よりも広範に行われていたが，それは機械製糸ではなく，座繰製糸であった。生糸の多くは生糸商のいた梁川，保原に販売されたが，「中品上州及ヒ横濱商人来テ買ウ」（上名倉村）や横浜に売られたのもある。座繰りも先進地域で二条曳のものであった。機械製糸が導入されたばかりであることは，明治10年10月１日に開業した「製糸場地坪数ハ千七百十六坪器械所縦二十間横五間器械ヲ両側ニ装置ス，四十八人繰ナリ・・・製糸釜数四十八，多々伊達郡ノ春蚕白繭ヲ用ユ又安達安積両郡ノ春蚕白繭ヲ用ユ糸ハ各種ノ織物ニ充ツ輸出ハ横濱ヘ向ケ欧米両国エ出賣ス」（梁川村）という表現からもわかる。なお，生糸にできない下等繭を使って真綿にしたのは，それを紡いで高価な紬織りの原料（横糸）となったからである。したがって，真綿の製造と糸紬は農家の副業であった。

生糸の織物であった平織は川俣地域に限定される。つまり，月舘，布川，糠田，下手渡からなる現月舘町，川俣，小島，飯坂，小神，秋山，羽田，鶴澤，東福沢，西福沢，小綱木，大綱木村からなる範囲である。生産物はほとんど川俣に運ばれていたので，川俣機業の原型が形成されていたといえよう。

Ⅲ－２　生産物による農村の地域区分

職業構成（農間余業）に物産を加味して考えると福島盆地の地域性がより鮮明に見えてくる。先ず，物産の項で産物をみると農産物の記載されている農村地域（Ⅰ）と薪炭や木羽板・貫板等木材が記載されている周辺地域（Ⅱ）に区分しうる。

「蘿蔔五百駄，菜五百荷，茄子五百荷，胡蘿蔔四百荷，芋百荷，胡瓜百荷，葱十荷，百合子十荷以上福島ニ鬻グ」（腰浜村）と書かれているように福島町から東の阿武隈川までの範囲は野菜類の生産が多く，腰浜村は近郊農業的色彩を帯びていたことがわかる。このような傾向は陸羽街道や阿武隈川の自然堤防と関係し，五十辺，鎌田，瀬上，岡部，箱崎村など現福島市の北東方面にみられた（Ia）。また，果樹は伝統的な果物である柿（干柿，串柿）が中心であるが，信夫山麓の御山村の柚，鎌田村の梨・桃などに特色があった。後年，萱場梨の産地となる笹木野原を含む笹木野村には梨の記載はない。

このIaの下流の阿武隈川の自然堤防地域でも野菜生産が行われていたが，そこは蚕種生産の先進地域であった（江戸波戸，1969）。すなわち，伏黒村，伊達崎，粟野，二野袋などの村はそれぞれ10,000枚以上の蚕種を生産していたのである。この伏黒村をはじめ，阿武隈川の蛇行帯を含む自然堤防地域では桑苗も生産されていた。つまり，桑苗は向河原村18万本，伏黒村・岡島村10万本と書かれているのはその証左である。この蚕種・桑苗地域はIbに類型区分されよう。

物産の項には当然，米，麦，小麦，大豆，粟，黍，蕎麦などの穀菽類の生産量も記載されているが，記載されていない村々の方が多い。当時，稲の作れるところではどこでも米作（＋養蚕）が行われたのであるから，穀菽類は無視されたのかもしれない。しかし，前述のように特産物の記載は詳細であるので，穀物の生産量の記載かなくても縄・莚・蔟・菰・草履などの藁加工の記載はある。例えば「莚二千五百枚，薦三千枚」（鎌田村），「藁莚五千枚餘，カマス千五百餘，已上二種農隙ヲ以テ製造シ福島保原等エ賣ル」（北矢野目村）と記載されている。これらの藁加工品は信夫郡の福島から飯坂にかけての平野部で盛んに行われていた。この稲作・藁加工品地域がIcに類型分けされる。ところで，信夫郡の南部では藁加工品の記載がない。しかし，水田の存在していたところでは自給用を含めれば当然藁加工は農閑余業として行われていたのであるから，この地域もIcに含めた。また，阿武隈川の自然堤防と阿武隈山地との間は，後背湿地で水田となっていたのでIcと同じ性格であった。しかし，ここでは畑作に楮が作られていたので，ここを水稲・楮地域（Id）と別類型にした。これは庄司（1954）の分類で畑作兼水田地帯に相当する。

一方，周辺部も薪炭（木炭）地域と木材（材・板・木場板）地域に区分されるものであろうが，ここでは山麓部を里山薪炭地域（Ⅱa）とし，茂庭方面から飯坂，桜本を経て水原，松川へ続く地域をⅡaとした。阿武隈山地の南部は平織が発達する機業地帯でもあるので，山間部機業地域（Ⅱb）とした[7]。安達郡の北部および阿武隈山地は製紙と楮に特色づけられるので，Ⅱcとした。

さらに，薪でも木材でも運搬困難な奥山地域では杓子や下駄を作った。杓子や箆あるいはこけしを作っていた木地師の集落は歩荷を行う集落でもあった。例えば，土湯村では「逓送六戸，女逓送八人，荷担挺送匠九戸」と記載され，現在地図からも消えてしまった李平村は「男は二等道路往還ノ行李物品ヲ負荷逓送シ或ハ餘業炭ヲ造り杓子木履材ヲ作ル女ハ牛ヲ牽キ行李物品ヲ駄逓スルヲ業トス」と書かれている。このような地域は縁辺部奥山地域Ⅲに分類されよう[8]。

以上から明治初期の福島盆地は大きくⅠ－Ⅲの3地域，亜地域Ⅰa-d，Ⅱa-c，Ⅲからなる8地域に区分された（第3図）。このような地域の特性は，信達二郡の村々が一方で国際経済に巻きこまれながらも福島町の都市的影響を受け，他方，自然堤防，後背湿地，丘陵，山地といった地形条件や原野や森林の存在といった自然資源の賦存状況に適応した姿を示すものといえる。

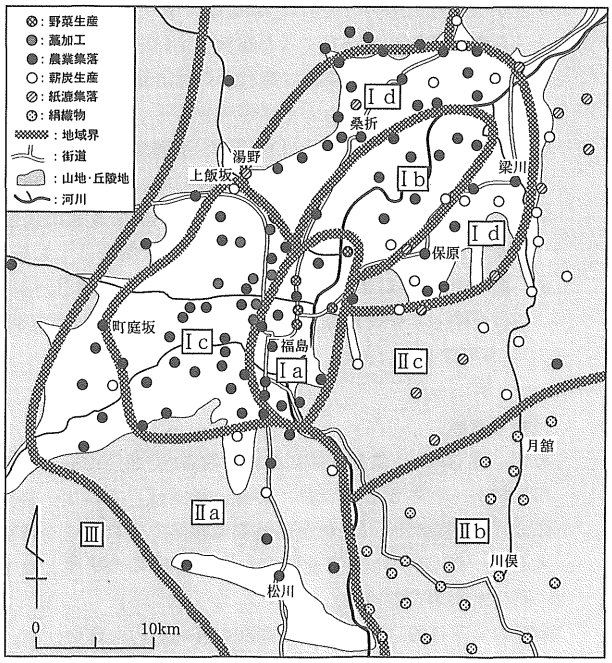
Ⅳ　むすび

『信達二郡村誌』は同時代の統計である『共武政表』や『徴発物件一覧』と比べて精度が高く有効な資料であることは庄司や大石の研究からも明らかである。両者の記載は蚕糸業に傾斜している

ので，本稿では物産物を含め明治初期の福島盆地の地域性を総合的に解明することに努めた。

都市は城下町の福島や陸羽街道の宿場町藤田，桑折，瀬上，松川などの諸村および梁川，保原，掛田，川俣の地方都市的村々であり，全体的には農村が支配的であった。また，農村には広範な農閑余業が存在した。インドの農村集落のように農村集落（村）は大工，左官，鍛冶屋や渡り職人の鋳掛屋，小間物屋を内包していた。また，商品経済の発展にともなう富農の形成は農村内に貧農や農村労働者の存在を必要とした。

信達二郡には３つの紙漉き地帯とその原料である楮の３つの供給地域が存在した。紙漉地帯は飯坂（上飯坂・下飯坂・東湯野）地区と舟生（舟生・山舟生・白根）地区および小国（上小国・下小国・大波）地区である。また，楮の需要地は後二者と隣接する安達郡の川崎村であり，供給地は阿武隈山地の山間地の諸村であった。蚕糸業に関連する養蚕・製糸・機業は庄司の指摘するように地域分化していた。製糸は広範に行われていたが，機械製糸は導入されたばかりで，専ら座繰製糸であった。また，阿武隈川の自然堤防地域は蚕種生産に特化し，阿武隈山地の山間地では平織が生産され，いわゆる川俣機業の原型が成立していた。全体として信達地方の農村は蚕種と生糸の輸出を通じて商品経済に深く巻きこまれていた。



第３図　明治初期福島盆地の地域区分

資料：中川英右編（1869）.

以上を考慮して信達二郡の農村地域区分を行うと，農村部Ⅰと周辺部Ⅱ，およびす外縁部Ⅲに区分される。さらに盆地床農村Ⅰは鮭漁・近郊農業地域（Ⅰa），蚕種・桑苗地域（Ⅰb），水稲・藁加工地域（Ⅰc），水稲・楮地域（Ⅰd）に区分された。一方，扇状地・山麓部農村Ⅱは里山薪炭地域（Ⅱa），山間部機業地域（Ⅱb），里山製紙・楮地域（Ⅱc）に区分され，外縁部Ⅲは奥山の木工・歩荷地域のみとなる。したがって，福島盆地は大きく３つ，全体で８地域に分類された。

本稿の資料収集・整理に際し，平成８年度文部省科学研究費（基盤研究Ａ「日本農業の耕作方式と再生産過程に関する農村システム論的研究」No. 06301085代表者斎藤　功および基盤研究Ｂ「軽種馬牧場の立地と持続的農業に関する地域システム論的研究」No. 08458024代表者斎藤　功）の一部を利用した。製図は本学大学院の仁平尊明君にお願いした。記して感謝申しあげる。

[註]

1）『共武政表』（明治８年版）は石田（1961）の畜産地域区分のように全国的にみる場合には有効である.

2）『徴発物件一覧』（明治24年版）は小野寺（1991）が北上川の舟運（町村別舟数）を表現するのに用いている.

3）水車の所在する町村名が異なったり，水車の数が合わない事例がある.

4）かつて柳田国男(1929)は,都や津・泊・湊などの「都市には田舎にない風」が存在するとし,「昼間から酒を飲む」というような事例をあげている.

5）クロート(Clout, 1972)は農村から渡り職人などがいなくなることを純農村化(ruralization)と呼び,かつて柳田国男も山村がその特性を失うことを農村化と呼んだ.

6）明治6年の蚕種輸出量は141万枚,金額300万円であった.国別数量では信濃55万枚,武蔵15万枚,羽前15万枚,上野13万枚,岩代11万枚の順であったので,蚕種産地間の流通が存在したと思われる.

7）山間部機業地帯(Ⅱb)は庄司(1954)が畑作兼水田地帯とし,大石(1958)が伊達郡南部とした地域と一致する.いずれも平絹生産が発達する機業地帯でもあることを指標としたものである.

8）李平や土湯は,板谷と同様コケシを作る木地師など木工の工人がいた地区で,ここにはシナノキでシナ布を織っていた茂庭村なども含まれよう.いわば奥羽山系のブナ帯の特色を帯びていた地域といえる(市川健夫他,1984).

[参考文献]

石田　寛(1961):農業地域における牧畜.野間三郎編:『生態地理学』朝倉書店,1-75.

市川健夫・山本正三・斎藤　功編(1984):『日本のブナ帯文化』,朝倉書店,307p.

江波戸　昭(1969):『蚕糸業地域の地理学的研究』,古今書院,389p.

大石嘉一郎(1958):明治前期における蚕種業の発展と地主制.高橋・古島編『養蚕業の発達と地主制』御茶ノ水書房,327-423.

小野寺　淳(1991):『近世河川絵図の研究』,古今書院,282p.

国見町(1967):府県税の新設と村税.『国見町史』1巻,504-510.

斎藤　功(1994):宮ノ下と箱根,わが国最初の高原避暑地.人文地理学研究,**18**,87-105.

参謀本部編(1978):『共武政表(明治12年)上』,柳原書店,630p.

庄司吉之助(1954):『明治維新の経済構造』御茶の水書房,310p.

田中啓爾(1939):河川漁業の地理学的意義.地理(大塚地理学会),**2**,84-95.

田中啓爾(1949):『地理学の本質と原理』,古今書院,410p.

田中啓爾編(1958):『地理的総合研究――川崎市と東京江東区――』,古今書院.360p.

中川英右編(1869a):『信夫郡村誌』,歴史図書社,1980年復刻.Ⅰ,556;Ⅱ,590;Ⅲ,584p.

中川英右編(1869b):『伊達郡村誌』,歴史図書社,1980年復刻.Ⅰ,576;Ⅱ,568;Ⅲ,576;Ⅳ,596p.

梁川町史編纂委員会(1991):『梁川町史』,11巻,852p.

柳田国男(1929):『都市と農村』,朝日新聞社,284p.

陸軍省総務局第一課輯(1979):『明治二十年徴発物件一覧表』,柳原書店,734p.

霊山町史編纂委員会(1983):『霊山町史』,3巻,967p.

Clout,H.(1972):*Rural Geography.* Pergamon Press,204p.